

園内の寄生植物

青山 幹 男

寄生植物は寄主植物に対する依存度に種々の段階が見られるが、一般に葉緑素の有無により全寄生と半寄生に区別されている。

寄生植物はそれぞれが特殊な生活史をもち、教材植物として利用できるので園内に産するものは保護し活用していく必要がある。

マツグミ

Taxillus kaempferi (DC.) Danser (ヤドリキ科)

マツやモミに寄生する常緑の半寄生植物で日本南西部に分布する。本園では系統進化園東側のアカマツ林をはじめ園内各所のアカマツに寄生が見られる。最大のものは直径50cmぐらいの球形の株になっている。強風で折れたアカマツの枝についていた株を標本にしている。



マツグミ

ナンバンギセル

Aeginetia indica L. var. *gracilis* Nakai

(ゴマノハグサ科)

万葉集の中で思い草と詠れている有名な寄生植物でイネ科の植物に寄生する。日本全国に分布し、夏から秋にかけて花茎を伸ばし紫色の美しい花をつける。本園では食堂横の斜面と苗圃の鉢の中に発生し、寄主植物はススキである。



ナンバンギセル

アメリカネナシカズラ

Cuscuta pentagona Engelm. (ヒルガオ科)

1970年頃見つかった比較的新しい帰化植物で今日では全国に広がっている。寄主の範囲が広く作物に発生するとやっかいな害草である。本園では系統進化園のハマゴウに寄生しているのが見つかったが、その後毎年発生して、キキョウ、バーベナ、シバザクラなど近くの植物すべてに広がっていった。園路横の目につきやすい所なので教材として利用しやすいが繁殖力が強く寄主植物の被害も大きい。



アメリカネナシカズラ